

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00928

研究課題名（和文）Assessing innovation in academic and linguistic skills in secondary education with a focus on IB-inspired curricula

研究課題名（英文）Assessing innovation in academic and linguistic skills in secondary education with a focus on IB-inspired curricula

研究代表者

D・G・Coulson (Coulson, David)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授

研究者番号：50341988

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：日本は従来の英語教育から国際バカロレアを日本の教育モデルに融合させハイブリッドモデルへと移行しつつある。今回の科研4年間で本研究の重要な目的は、特に日本、更にはアジア太平洋地域における国際バカロレアの現在の発展段階を明らかにすることであった。日本の生徒達に高次思考力を身につけさせるために、新しい教育学的方法が必要である。そのための一つの方法として、国際バカロレアシラバスの教育学のフレームワークに注目した。この科研プロジェクトの途中で出版された本には日本に関する章が多く含まれている。その結果、伝統的な学校で働く教師がどのように教育的実践を変化させることができるのかがこの研究の重要な焦点となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

伝統的な教育モデルは、過去から学んだことを維持するために重要な役割を果たすが、より高次の思考で補完する必要がある。批判的な反応で、学習者が学んだことに疑問を抱くことを可能にする。2021年度、文部科学省はカリキュラムを改訂した。英語での対話力、仲間との意見交換力を養うことを目標とするようになった。IBシラバスに代表されるようなスキルへの根本的な転換が求められているのである。そこで、新しいカリキュラムの要求に教師がどのように対応するかが重要な課題となった。その結果、十分な時間とトレーニング、そしてこのプロセスの難しさを理解することが不可欠であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：Japan is moving from a traditional focus on prescriptive English education towards a more forward-looking hybrid model, melding the influences of the International Baccalaureate curriculum into the existing Japanese educational model. During the four years of this project, a crucial aim of this research was to clarify the current stage of development of the International Baccalaureate syllabus specifically in Japan, and further in the Asia Pacific region. A new pedagogical approach to foster critical thinking skills for Japanese school children is necessary. One approach to achieve this is by focusing on the pedagogical framework of the International Baccalaureate syllabus. The book which was published as part of this Kaken project contained many chapters relating to Japan. A corollary of this is how teachers working in traditional schools are able to shift their pedagogical practice has become an important focus of this research.

研究分野：Applied Linguistics

キーワード：Education IB education Reform Teacher Identity Qualitative Interviews State schools

1. 研究開始当初の背景

日本を含むアジア太平洋地域では、子どもたちの批判的思考力の育成に重点を置いた中高生教育が求められている。戦後の学校教育は、杓子定規な事実の暗記を基本とする教育が続いていた。しかし、中等教育学に革新的なものが現れ始めた。その代表が国際バカロレア (IB) のシラバスであった。このシラバスの教育の質は非常に高く、その結果、IB 校の生徒は高い割合で名門大学に進学し、その後、非常に良い仕事に就くことができていた。しかし、このシラバスは、世界中の限られた私立学校で提供されるようになり、生徒は主に裕福な家庭の子女で、授業は英語のみで行われていた。その結果、IB は英語を第一言語とする子どもたちを主な対象とすることになっていった。英語が母国語でない国の学校でも、やはり英語のカリキュラムしか提供されない。そのため、現地の子どもたちは、この名門校の教育を受けることができないままだった。これは、日本でも同じような状況であった。しかし、近年、文部科学省の新しい教育政策のもと、公立の一条校でも IB シラバスを日本語と英語で提供するようになり、徐々に状況が変わってきている。これは、日本の子どもたちが高次の思考力を身につけるための良い機会提供となっている。特にアジア太平洋地域は、伝統的で画一的な教育制度があるため、教育改革という分野での研究の必要性が明らかになっていった。

2. 研究の目的

日本では、従来の画一的な英語教育から、世界的なカリキュラムである国際バカロレアの影響を日本の教育モデルに融合させた、より先進的なハイブリッドモデルへと移行してきている。日本の学校改革は、英語力の低さに悩む日本にとって重要な課題である一方、東アジアを中心とした国々では、教育やビジネスの分野で国際人を育成するために、21 世紀型のマルチリンガルを育成することを目標としている。具体的には、日本における IB が、以下の 3 点を目指した教育実践にどのようなプラスの影響を与えているかを検証することが重要である。第一に、高次の推論、分析的な研究、プレゼンテーション能力 (探究型学習、AL: "active learning" や "deep active learning") とも呼ばれることがある。第二に、英語の第二言語習得。IB の導入と予想される成功は、英語カリキュラムの改革や IB 以外の分野のカリキュラム全体の改革に建設的な影響を与えているのだろうか。特に、知識理論 (Theory of Knowledge、以下 TOK) カリキュラムは IB の中心的な要素であり、公立学校の子どもたちの批判的思考力を養うのに役立つものである。今後、このカリキュラムがより広がっていく中で、通常教育の一環として TOK の実益を評価する必要がある。日本における 21 世紀型教育の理念の展開のために、その効用を評価することは、大きな意味があるはずだ。第三に、従来のシラバスを中心に教えてきた教師が、文部科学省が推進する国際バカロレアシラバスの普及に伴い、その教え方を調整しなければならなくなった場合の専門性の向上とアイデンティティについてである。

3. 研究の方法

上記のこの問題を調査するために、2019 年、私の科研プロジェクトの狙いは、近年、アジア太平洋地域の IB 校でどのような教育的イノベーションが実施されているかに着目し始めることであった。日本を含む中東、南アジア、東アジアの国々である。このことを深く調査するために、国際的な出版社に、アジア太平洋地域の IB 教育改革をテーマとした書籍の編集を申請し、この地域のさまざまな状況にある教師や研究者の章を集めることを目標とした。プロジェクトの後半では、この地域の学校で教鞭をとる教師への質的インタビューが計画された。その結果、この地域の各国において、教師が生徒の批判的思考力をどのように育成しているのかについて、有益な比較ができることが期待された。教育の特性は地域によって異なるので、特に日本の教育を進める上で有益な知見が得られるはずであった。しかし、パンデミック時に他国を訪問することが困難であったため、日本の教師の事例を調査することに焦点を移した。アジア太平洋地域の先生方から募集した章を中心に、新しい本を編集することとし、プロジェクトを仕切りなおした。編集作業は 2020 年に始まり、約 1 年間続いた。アジア各国から多くの応募があった。具体的には、約 1 年かけて集中的に編集とフィードバックを行うプロセスであった。これには、査読のプロセスも含まれていた。そのため、教育改革の分野で 30 人以上の専門家を探す必要があった。これは非常に集中的なプロセスであった。査読を受けた後、次の段階の編集が始まり、各章を入念にチェック、書き直しの指示を著者に送るを繰り返した。この段階には、さらに 6 カ月ほどを要した。そして、丁寧に編集された原稿が出版社 (IGI Global) に提出され、2021 年ようやく本が出版されるに至った。タイトルは "アジア太平洋地域の教育改革と国際バカロレア" である。また、日本での章の著者が勤務する学校のいくつかを訪問すること

も実現した。広島叡智学園は実際に訪問できた日本の IB 校のひとつである。非常に影響力のある教諭を 2 回訪問することができた。彼女からもこの本に 1 章を寄稿して頂いた。彼女との交流を通して、研究の次の段階が明確になった。これについては、以下のセクションで説明する。

4. 研究成果

本書の編集過程で、主に日本の先生方や研究者の方々とお会いし、重要な示唆や今後の研究の可能性についてご指導いただいた結果、さらなる研究課題が明らかになった。この 2 年間は、特に、日本の一条校が通常のシラバスに加えて IB シラバスを提供するようになったケースに焦点を当てた研究を行ってきた。そのような学校（例えば、滋賀県長浜市の虎姫高校）を訪問し、これまでのキャリアとは全く異なるシラバスを教えることに適応しなければならない教師陣の経験について、多くの直接的な洞察を得ることができた。その結果、研究の焦点は、IB シラバスの指導を開始する必要性に迫られた公立校の教師のケースに絞られた。特に、IB シラバスの指導は、これまで慣れ親しんできたわけでもなく、体系的なトレーニングを受けてきたわけでもない専門科目の指導についてであった。そこで、2022 年度の間、岡山理科大学の代表者ダッタ・シャミ教授による質的インタビューが行われた。ダッタ教授は日本語を母国語とし、かつ IB スクール政策の第一人者であるため、以下のように日本全国各地でインタビューを実施した。特に、教員の職業経験、職業的アイデンティティの形成について調査することを目的とした。その結果は現在も分析中である。来年度には研究成果を発表することを目指している。また、学会で研究発表を行う予定もある。この研究はまだ継続中で、次の目標は、調査を継続するために、次の科研費に応募することである。

既述した通り、本が出版されたことで、より多くの研究課題が提示されたが、これは主に、重要な洞察や将来の研究機会に関する指針を与えてくださった先生方や研究者の方々に出会えたおかげに他ならない。この 2 年間、私のチームは、日本の公立および私立学校において、通常のシラバスに加えて IB シラバスを提供するようになった学校に特に焦点を当ててきた。そのような学校（例えば、滋賀県長浜市の虎姫高校）を訪問し、全く異なる焦点のシラバスを教えることに適応しなければならない先生方の経験について、多くの直接的な洞察を得ることができた。その結果、一般的な一条校の教師が、IB シラバスの指導を開始する必要性に迫られ、それに適応しなければならないケースに研究の焦点が当てられることになった。特に、IB シラバスの指導に慣れていない、あるいは体系的なトレーニングを受けたことのない教員は、この課題に直面することとなった。

そこで、まずは教員のアイデンティティの変容に関する先行研究を分析し、その上で半構造的インタビュー調査項目と実施方法をチームのメンバーで数回にわたって改良を行い、半構造的インタビュー調査方法に向けて準備をした。2022 年度に、岡山理科大学の分担者ダッタ・シャミ教授による質的インタビュー実施のために、各校の教員及び管理職へ数回説明に伺い、調査の承諾を得た。

開智学園の各国際バカロレア学校
県立横浜国際高等学校
神田女学園
佼成学園
県立甲府西高等学校
県立高知国際高等学校
Pathways IB World Schools、インド

この中でいくつかの学校ではすでに調査も実施済みであり、データの文字起こしも済んでいる。他の学校に関しては今後、半構造インタビュー調査及び調査の文字起こしを実施し、MGTA 方法で分析予定である。分担者のダッタシャミ教授（岡山理科大学）は日本語を母国語レベルで研究調査に使用できるため、また、IB スクールの現状及び、IB の国策政策を熟知する第一人者であることから、ダッタ氏が日本全国各地でインタビューを実施した。特に、教員の職業経験や職業的アイデンティティの形成について調査することを目的とした。その結果は現在も分析中であるが、2022 年度は科研の代表者にも数回報告をしに、分担者が代表者の元へ出張した。

2023 年度には学会で研究発表と論文発表を目指しており、この重要な調査を継続するために、次の科研費に応募することも今後の計画目標である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 David Coulson & Michael Davies
2. 発表標題 Overview of vocabulary and extensive reading in a second language. Introduction of the concept of “Four Strands” for a balanced syllabus.
3. 学会等名 Workshop to Enhance Students’ Emergent Bilingual Status The National Taipei University workshop for teachers (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 David Coulson, Shammi Datta, Michael James Davies	4. 発行年 2021年
2. 出版社 IGI Global	5. 総ページ数 414
3. 書名 Educational Reform and International Baccalaureate in the Asia-pacific	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Content and Language Integrated Learning (CLIL) http://pr.ntnu.edu.tw/en_about_us/en_news.php?mode=data&id=12507
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	デービス マイケル (Davies Michael) (50613197)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	D a t t a S h a m m i (Datta Shammi) (20795984)	岡山理科大学・教育学部・教授 (35302)	
研究分担者	井藤 眞由美 (Ito Mayumi) (20908024)	関西学院大学・教職教育研究センター・教授 (34504)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関